

ねじりはちまき

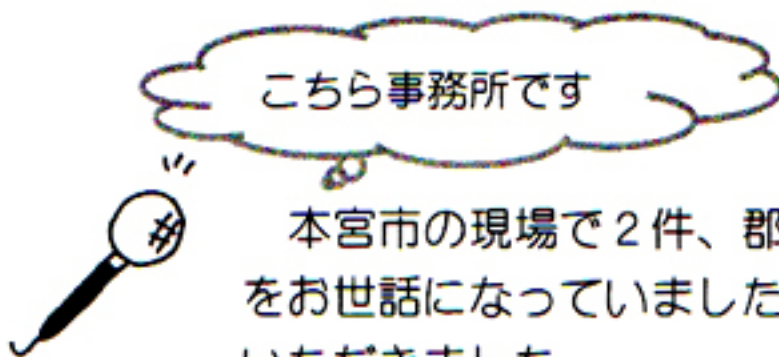
11月 霜月 立冬 小雪の月になりました。
11月3日、文化の日です。8日 立冬、15日 七五三です。
23日 勤労感謝の日となっています。

冬という季節になっても花が見られるのが山茶花です。
観賞用に庭園などに植えられています。秋から冬にかけて、白色や薄紅色の、椿の花より少し小さめの花を付けます。別名、小椿ともいわれています。中国では山茶花（サンサカ）と呼んでいますが、日本では山茶花（サザンカ）と日本語で呼んでいるのだそうです。

九州地方を中心に、種子から搾った食用油が出回っているそうです。

朝夕の冷え込みが厳しくなってきました。
風邪などに負けないよう、くれぐれも注意してお過ごし下さい。

幸田 常一



本宮市の現場で2件、郡山市の現場で1件、住宅新築工事をお世話になっていましたが、すべて完成しお引渡しをさせていただきました。

現在は本宮市の現場で、住宅の修繕工事をさせていただいております。

<会社近況>

11月に入りました。
気温がぐんと下がり、寒くなりましたね。
事務所の庭に植えてあるもみじも、美しい赤い色に紅葉しています。
パソコンで目が疲れたりすると、庭に出てもみじを見たり、遠くの山々を眺めたりしています。
もみじの鮮やかな赤い色は、気持ちも目もスッキリとさせてくれます。
これから、ますます寒くなっていきますね。お体どうかお大事に、、、

住宅新築工事も完了し、現在本宮市の現場で住宅修繕工事をお世話になっております。また事務所では、図面や見積書の作成、書類作成などしているところです。

おいしい♥11月
「白菜」

白菜のおいしい季節ですね。
白菜はほとんど水分ですが、ビタミンcや食物繊維、カリウムなど含まれていて、ビタミンcはレタスの約4倍といわれています。
鍋料理にはかかせない具材ですし、炒めものやお漬物、シチューに入れても合いますよ。寒い冬、たくさん食べて温まって下さい。

令和元年11月5日発行
有限会社 幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話、0243-44-3816

<後記>
事務所内はまだ少し散らかっていますが、通常通り業務を再開しています。ご心配をおかけいたしました。
(事務員k)

“ミツバチ”について

今回は“ミツバチ”について取り上げてみたい。ハチというと刺されるので怖いというイメージを持っている人が多いかも知れない。でも、ミツバチは人間に“ハチミツ”を提供してくれるので怖いイメージは薄れていると思う。そのミツバチだが、果たしている役割は人間にハチミツを提供しているのみならず、植物界の生存に関わる「受粉」を担う重要な役割を担っている。これは誰もが承知していることだろうが、何と植物界はその受粉の70%をミツバチに依存しているというのだ。一匹のミツバチが一日で受粉する花の数は3千個に及ぶという。これは驚くべきことである。我々が心しなければいけないのは、これら植物には人間の「食料（農産物）」も含まれていることだ。

そこでミツバチがいなくなったら、どうなるかということだ。それは「地球生命」の停止である。そのことが一部でささやかれている。2006年頃から世界的にミツバチが急激に減少しているというのだ。もちろん二ホンミツバチも含めてのことである。従って養蜂家の飼育箱数も減少が著しいとのこと。絶滅の危機に瀕しているという人もいる。本当はどうなのだろうか。その前にミツバチの生態について見てみよう。

ミツバチには、二ホンミツバチ（在来種）とセイヨウミツバチ（1887年に導入される）がある。近代養蜂が確立される過程でミツバチと言え、セイヨウミツバチを指すまでに今日主流を占めている。ミツバチは極めて発達した脳を持ち、群れを作って高度な社会生活を営む「社会性昆虫」である。一つの群れは一匹の女王バチと、数千～数万匹の雌の働きバチ、その一割以下の雄バチからなっている。そしてその群れは、厳格な分業組織とコミュニケーションの手段を持ち、環境の変化に巧みに対応する。では、分業としてのそれぞれの働きを見てみよう。先ず女王バチだが、その働きはまさに「産卵器械」というべきものだ。先ず羽化して1週間目頃、自分の巣から雄バチの集まっている所へ飛び立ち、何回かに分けて交尾を行い、約700万個の精子を貯めこむ。そして、これらは2～4年間の生涯で使われる。交尾から1～2週間すると卵を産み始める。気温が上がるにつれて産卵数が増え、初夏の最盛期には1日に2千～3千個も産卵する（厳寒の1～2月には産卵しない）。参考までに一雌バチも産卵能力はあるが、女王バチが体表から出すフェロモン（分泌物質）をなめると産卵しなくなる。さて、女王バチは産卵の時、卵をどのように巣に産み付けていくのかというと、巣の中心にある巣房から遠心状に産み付けていく。その場合、内径が約6.5ミリ・とやや大きい巣房には雄バチの、約5ミリと小さい巣房には働きバチの卵を産む。わずかなサイズの違いを二本の前肢で計測して産み分けるのである。驚くべきことだ。このようにして、女王バチは産卵以外の働きはしない。食事も働きバチに運んでもらう。一方、交尾に関わる雄バチは群れの女王バチと交尾するのが唯一の仕事だ。雄バチは交尾の時期になると、上空に集団を作って女王バチを待ち、首尾よく交尾に成功すれば、その場で即死して一生を終える（成功しないこともあるらしい）。

次は働きバチのことだが、群れの基本的な構成員は働きバチである。この働きバチは年齢ならぬ「日齢」に応じて仕事を変えていくというのだ。それは次の通りである。

- ①若バチ期（生後1～3日ぐらい）：巣内の掃除以外に余り仕事をしない。
- ②育子期（生後3～10日ぐらい）：育児バチとして子育てを中心とした仕事。
- ③内勤期（生後10～20日）：巣作り、蜜と花粉の受け取りと貯蔵などの仕事。飛行練習が始まり、最後の門番を勤める。

④外勤期（その後死ぬまで）：採餌バチとして、花蜜と花粉、水などを採ってくる。では、ハチミツはどのようにして作られるのか。これは内勤バチの仕事である。外勤バチから蜜を口移しで受け取った内勤バチは、空の巣房に一旦吐き出した後、何日かかけて体内に入れたり戻したりを繰り返す。この時ミツバチの唾液に含まれる酵素によって、花蜜の主成分の「ショ糖」が「果糖」と「ブドウ糖」に分解され、ハチミツに変化する。その

後、仲間とともに羽を震わせて風を送り、水分を飛ばして、ハチミツを巣房に入れて蜜蝋で封印して出来上がりということになる。これは一種の加工保存食品である。

ハチミツ作りに関連して面白い話を。働きバチは、晴れた日に花蜜や花粉の匂いを頼りに飛んでいき、花にたどり着くと、ストローのような口で蜜を吸い、蜜胃という袋に貯めて巣に持ち帰る。花蜜を巣に持ち帰った外勤バチは、口移しで花蜜を内勤バチに渡すが、その際花蜜が潤沢な花から帰った時だけ「身ぶりことば」で蜜源に関する情報を伝えるというのだ。その「身ぶりことば」は、約50秒以内に花蜜を渡せた場合、外勤バチはもっと花蜜を採集すべきだと判断し、入り口近くの巣板の上で「尻ふりダンス」をする。その尻ふりの仕方により蜜源までの距離が100m以内か以上かを示す。これを見た他の働きバチはその後ろに数珠つなぎになってダンスをし、巣を飛び出していくという。また、外勤バチが花蜜を渡すのに約50秒以上かかった時は、花蜜の受け手が足りないと判断し、体を激しく震わせる「身震いダンス」をする。そうすると、手の空いている他の働きバチが受け取り貯蔵の仕事を始めるといふ。いずれも効率的に仕事を行う知恵がそこにある。ところで、ミツバチが一生かけて集めるハチミツの量はどの位なのだろうか。皆さんはどう思いますか。その量はというと「茶さじ三分之一」程度なのである。本当にご苦労さま。

ミツバチの「群れ」についてひとつ。2月頃になると、女王バチの産卵が増え、4~5月頃になると働きバチが増えてはちきれそうになると、巣の中に「王台」ができ、そこに次の女王バチの卵が産み付けられる。そこで新女王が誕生する数日前に、旧女王は働きバチと雄バチを引き連れて巣から出ていく。これが「分蜂＝巣分かれ」である。ミツバチは住まいを次の世代に譲ることで群れを増やしていくのである。

ここで、ニホンミツバチについて。最近ニホンミツバチの良さが見直されている。ニホンミツバチはセイヨウミツバチに比べ、群れの規模は小さく、採蜜量は少なく、しばしば逃去するなど飼育しにくい欠点がある。だが、次のように優れた点も多い。①オオスズメバチなど外敵と戦う術を持ち、ダニの増殖も防ぐ。②アメリカフソ病などの伝染病にかかりにくい。③性質がおとなしく、めったに刺さない。④気温が低く（9度くらい）くても花粉集めに出る。山野の小さな花も蜜源として利用する。⑤深い味わいの蜂蜜ができる。

では最後に「なぜ、ミツバチは絶滅の危機に頻している」というのか。どうもそれは「新農薬」が大量に使用され始めたことが原因のようだ。EUでも問題にされている。その新農薬は、ネオニコチノイド系と呼ばれ、昆虫の神経を侵して殺す「神経毒」で「カメムシ」の防除が主な目的である。ところが、その有効成分である「クロチアニジン」はとりわけミツバチへの急性毒性が強い。この商品名は断トツと称されるが、その水溶液には「ミツバチを放飼している地域では使用を避けてください」との注意書きが付いている。でも、使用が自粛されることがなかったのである。その後、農林水産省でも取り上げられるようになったが、残念ながら「ミツバチ」に対するきちんとした対策は取られていない。

ここまで書いてきてつくづく思うのだが、自分もその一人だが、「ミツバチの存在」の重要性について認識されていないと痛感する。今回のテーマを取り上げるに当たっては、岡田幹治著「ミツバチ大量死は警告する」を大いに参考にさせていただいた。また、このテーマを取り上げる動機付けは、YOUTYUBU「ミツバチと地球とわたし」をみてのことである。ぜひご覧いただければと思う。

奥只見の名峰、鋭峰 荒沢岳

【今回登った山の概要】

(百は日本百名山、◎は日本二百名山、○は日本三百名山)

9/25～26

荒沢岳 (◎あらさわだけ 1968.7m 新潟県魚沼市 (旧湯之谷村))

この山は以前から気になっていた興味深い山である。

深田久弥(*)ファンの全国組織である深田クラブが創立十周年記念事業の一つとして、昭和59年(1984年)に選定した「日本二百名山」に荒沢岳が入っている。

(*) 深田久弥：石川県大聖寺町(現加賀市)生れの小説家、随筆家、登山家。山岳随筆『日本百名山』は1964年に新潮社から出版された。(1903-1971)

しかし、社団法人日本山岳会が6年前の昭和53年(1978年)に選定した「日本三百名山」には入っていない。

深田クラブが荒沢岳を「日本二百名山」に選定するに当たっては相当の議論がなされたようであり、また、日本山岳会はなぜ「日本三百名山」に選定しなかったのか。このあたりのことを想像すると面白い。

今回台風17号が通り過ぎて好天が3~4日続く予報なので思い切って荒沢岳に挑戦することにした。深田クラブと日本山岳会の選定の議論を自分なりに歩いて考えてみようと思った。ただ長時間を要し険しい山らしいので覚悟が必要で今まで登らなかった。

9月25日(水)13:20、妻から夜と翌朝のおにぎりを貰い自宅発。磐越道、北陸道経由長岡から関越道に入り、小出ICで下りて銀山平登山口を目指す。国道352号線を折立のシルバーライン入口(旧料金所)から奥只見シルバーライン(県道50号)に入る。この道路はほとんどがトンネルで冬季閉鎖され、二輪車・歩行者の通行は不可。ところどころ水が染み出ている陰気なトンネルで狭くカーブも多くスピードは出せない。14km程走りトンネルの三差路のところで標識に従い銀山平方向に右折する。橋を渡り右折したらログハウスと数軒の旅館のある銀山温泉に着いた。登山口を探したが見つからなかったので旅館の人に聞いて引き返し登山口駐車場に17時前に着いた。初めから登山口近くの伝之助小屋を目指せば良かった。

10台位置ける駐車場には長岡ナンバーの車が1台駐まっていたが人は乗っていない。和水洗トイレは良く管理され、きれいに清掃されていた。

登山口の標識に「魚沼市山岳遭難防止対策協議会・魚沼市」の名前で次のように書いてあった。

登山は全て自己責任です。(上部にヨコ書、下地が赤、白文字)

警告 (タテ書、黒文字、字の大きさは3倍くらい、以下タテ書)

荒沢岳は上級者向け (赤文字) コースです。特に前グラ (*) (まえぐら) 付近では過去に滑落死亡事故 (赤文字) が発生しています。難所の鎖場は、豪雪による破損を防ぐため、必要最小限しか設置していません。(各所のアンカーは、ザイルワーク用です。) 本格的登山の経験が無い方は、引き返す勇気を。(線引きされている)

(*) 前グラ: 「グラ」の漢字は、「山」冠に下が「品」以下「グラ」とカタカナ表示します。

土地勘を得ようと車を走らせてみた。奥只見湖の船着き場、広い駐車場には車が数台と人が10人くらいいた。釣り客か。食料を売る店や缶ビールの自販機を探したが皆無。銀山平キャンプ場の管理棟で、恥ずかしながらダメ元で聞いて見たら、ピンポン! 売っていた! ドライ 500ml 500円。キャンプ場からは青空の下に荒沢岳の稜線が望めた。

伝之助小屋はのぼり旗が立っていて、引水で水車が勢いよく回っていてパイプから水がほとぼしっていた。

いつものようにお湯を沸かし現地調達のビールを飲みなら夕食とする。18時の車の温度計で15度C、寒い。19時就寝。夜中起きてみたら空が近く満天の星で、星座を同定すると面白いと思ったが、山登りにきたのだと思い直しまたすぐに寝る。

26日、山あいなので明るくなるのが遅い、5時起床、曇り、霧がかかっている。よく寝たもんだ。朝食は山の途中でおにぎりを食べることにし、準備をする。5時半頃車が1台やって来て熟年男性が一人山の準備を始めた。

話しかけたら、愛知県豊橋市の人だった。(以下Aさんと記す。) 熊対策として道の駅に車中泊したとのこと。どちらからともなく一緒に行きましょうかとなった。Aさんも一人では心細かったようだ。

5:45 登山口 (760m) 発。Aさんの先行で目の前にそびえる前山を目指す。霧が立ちこめる樹林帯の中を登って行く。自己紹介を兼ねて話をする。彼は60代半ばで百名山は踏破し、今は二百名山と三角点百山 (ガイドブックがあるとのこと) を登っているとのこと。今年の3月で仕事も終わり、いよいよ山登りを重点的にやりたいとのこと。自分は三百名山 (二百名山を含む) をやっていることなどと話した。

樹林帯の中、霧が晴れていく気配を感じながら小川を渡るといきなりの急勾配になる。谷側を少し気にしながら登る。紅葉は始まったばかりのようだ。三角点のある前山(1090m)からは、ブナの尾根通しに前グラの取付きまで緩やかな登りで、稜線上の青空に突き出ている山頂を見ながら歩くことができた。ブナの色づきが増してくる。右手の樹間越に見える越後駒ヶ岳(百2003m)の雄大な姿に力を得る。

前グラ(1536m)は荒沢岳の前に立ちふさがるように鋸状にとがった岩壁がそそり立っている。この荒々しい姿も荒沢岳の名前の由来なのかと思う。色づいている低木もある。登りっぱなしではなく大きな下りもあるようだ。緊張する。

最初は30m程のスラブ状の滑らかな岩をロープを使って下る。それから鋸状の岩をハシゴや長いクサリを使ってよじ登る。Aさんが次に進むまで待つ。岩の間から水が染み出ている泥がたまっているところもあり滑りやすく避けて通る。終わったと思ったら次の鎖場。

この岩場で足を踏み外したら、クサリが外れたらどこで止ることができるのかなどと考えると気が抜けない。自分が休みたいと思っても20mくらい先を行くAさんは休まずチャレンジしていく。登山口の看板に書いてあった『警告・・・滑落死亡事故』の意味が分かった気がした。条件がもっと悪く、特に疲労が貯まった下山時に、雨や霧で視界がきかなかったり染み出る水量が多かったりすれば、一瞬の気の緩みで滑落もあり得ると思った。

現在はこれでもクサリなどが整備されて良くなったのだろう。日本山岳会が三百名山を選定した1978年頃はまだ整備が進んでいなくて、経験の少ない登山者が多く登ることを恐れたために選定されなかったのではないか(?)などと推測してみた。

登り切った前グラの頂(8:35着)で息を整えながら自分でよく登れたなどと感心する。下山時にこの難所を下ることを思うと、可能であれば避けたいと思う。遮るもののない越後駒ヶ岳を眺めることができ、目指す荒沢岳の鋭鋒も良く見える。上部の紅葉がきれいだ。眼下にはグリーンの奥只見湖が入り江のある川のように見え、船が浮かんでいる。湖の先には会津朝日岳(◎1624m)などの会津の山並みが続いている。

いよいよ山頂を目指すが、やせ尾根が続き気は抜けない。山頂直下にも岩稜があり、乗り越えたり切れ落ちた南側をトラバースして山頂にたどり着く。

10:15。登山口から4時間半、前グラの頂から1時間半を要した。北海道から来たという先客が一人下りていく。

山頂は狭く真ん中に自然石を加工した標柱・・・「荒沢岳1968.7m 奥只見山岳会」と彫られた標柱があるのみ。少し風があるが快晴の上天気で眺望は素晴らしく、北・西側にあたる正面右手に越後駒ヶ岳、その左に中ノ岳(◎2085m)が

どっしりと構え連なっている。駒ヶ岳よりも中ノ岳の方が山体のボリュームがある。二つの山をつなぐ稜線の奥に、越後三山のもう一つ、八海山の八ツ峰の群峰と入道岳（◎1778m）が見えている。中ノ岳の左奥には巻機山（百 1967m）。南側には山容が美しい双耳峰の燧ヶ岳（百 2356m）がすぐに分かる。右奥に山頂部が丸い溶岩ドームの日光白根山（百 2578m 関東最高峰）もすぐに同定できた。平坦な山頂部の平ヶ岳（百 2141m）とは対照的だ。至仏山（百 2228m）も見える。東に会津駒ヶ岳（百 2133m）などの会津の山々……。かつて登った山々に思いをはせる。駒ヶ岳と中ノ岳を背景に標柱とともにAさんに写真を撮って貰う。

中年の男性が登って来た。中ノ岳まで縦走するとのことで南西に連なる稜線上のルートを図で確認する。（「山と高原地図」2004年版にはルートの記載はないが、近年地元の山の会の人たちが整備して、現在は良く歩かれているとのこと。）途中テントを張るといふ。Aさんと、自分たちも下山時の前グラの岩場を避けるために中ノ岳まで縦走したいなどと冗談を言い合う。

水分とエネルギーを補給し 10:55 下山を始める。今度もAさんが先行する。怪我は下山時が多いので、慎重に歩く。

1時間程やせ尾根を下ったところで道を誤り、ザレた急斜面を 25m程下ってしまう。他にも間違う人がいて滑った跡ができてしまっている。登山道に復するため、人の通った跡のある横の藪漕ぎはせずに、間違ったところまで登り返し、テープのある所で休憩。

前グラでも休憩し、1時間かけて慎重にこの山の核心部、最大の難所を通過する。前山の三角点 15時着。

15:45 駐車場着。あまり歓迎しない数匹のサルが出迎えてくれた。

日本三百名山にはなく、日本二百名山の奥只見の名峰、鋭鋒 荒沢岳……。標高差 1200m、休憩を含め 10時間の山行を無事終える。

Aさんは翌日新潟県・長野県境の佐武流山（◎2192m）か鳥甲山（◎2038m）に登るといふことで、あいさつもそこそこに出発していった。

帰路はシルバーラインのトンネルを通らずに国道 352 号線を通って小出 IC に抜けることにした。銀山平からかなり登って、枝折峠に向う道路の展望スペースから見た荒沢岳は、両翼を広げた鋭鋒が夕日に映えて美しかった。